



「低音 (low frequency)」の魅力

私の「本分」であるオーディオの世界には、「低音に始まり低音に終わる」というライフサイクルがあるように思う。

オーディオの初心者は、威勢よくボコボコとなる低音 (low frequency) に快感を覚えがちである。これは、ちょっと気の効いたミニコンボでも簡単に実現できるという意味で、投資の限界リターンは高く、最も幸せな時期である。しかし、様々な音楽を聴いているうちに、次第に美しい高音 (high frequency) に魅せられるようになる。私が初心者だった30年前に比べると、今ではこれもさほどの投資を必要としない。レアメタルの加工技術が飛躍的に進歩したおかげで、安価なツイーターでも可聴範囲を超える高音を再生できる。また、日進月歩のデジタル変換アルゴリズムやデータ処理能力によって、SACDのようなメディアやインターネット配信を用いた超高域データの再生が可能となっている。

しかし、ここから先の道程は急に険しくなる。すべての音楽の基盤が低音にあることは誰でも知っているが、解像度の高い本物の低音を再現するのは極めて難しい。超低域再生には大口径のウーファーが必要となるが、これを高解像度と両立させる技術は未だに存在しない。ウーファーを強力に駆動するには高いドライブ能力を持つアンプが必要となるが、現

在の技術では、サイズも価格も常識を超える水準となる。かくて、オーディオの趣味は、「エコ」に逆行するとかいった生易しい話ではなく、家庭不和のリスクをどこまで引き受けるかという真剣勝負になる。

一方、わが社の「本分」である情報技術が金融分析にもたらした恩恵の一つに、高頻度データの分析がある。株式や債券、為替といった様々な金融資産では、高頻度データの分析とアルゴリズム取引が互いに影響しつつ発展してきたし、当局や研究者もこ

うした分析手法によって価格変動のダイナミクスをより良く理解しうるようになった。

もっとも、今回の金融危機は、金融市場のプレーヤーも中央銀行も、景気循環を通じた低頻度データの発する警告を読み取れなかったことと大いに関係している。金融システム全体としてポジションを蓄積するこ

とや高成長の下で低金利政策を維持することが、数年の時間をかけて資産価格の過大評価をもたらし、最後には大幅な修正に繋がるリスクに十分な注意が払われなかった。高頻度 (high frequency) データの攻略という輝かしい成果を挙げた金融分析が、景気循環のような低頻度 (low frequency) データに足をすくわれたとすれば皮肉なことである。

金融分析も、低頻度データの分析に再び目を向ける時が来たようである。 (井上 哲也)

